



米国王導の成長困難に

新年から、世界ではいろいろな大きな出来事が続いている。米国によるイラン司令官殺害をきっかけにイランと米国の間で緊張感が高まっている。台湾では民進党の蔡英文総統の再選が決まった。中国がどのように出てくるのか、この先の動きが気になるところだ。

世界のどこかでは、常に大きな出来事が起きるものだ。新聞やテレビのニュースがそうした事件や事故を大きく報道することにも慣れてきた。ただ、経済のグローバル化が進み私たちの生活が海外と

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

より緊密に結びつくようになる。崩壊した年だ。これで社会主義国が崩壊し、米国王導で市場経済・民主主義が世界をリードすることが期待された。多くの政治学者がそうした未来を描いた。そして10年国と米国の確執は日本の企業の業績にも大きな影響を及ぼしかねない。

グローバル経済

そうした意味では、グローバル経済や社会の大きな流れを常に意識する必要がある。私は二つの年を起点とした流れの変化に注目したいと考えている。一つは1989年、そしてもう一つは2001年だ。

1989年はベルリンの壁が崩

壊した年だ。これで社会主義国が崩壊し、米国王導で市場経済・民主主義が世界をリードすることが期待された。多くの政治学者がそうした未来を描いた。そして10年国と米国の確執は日本の企業の業績にも大きな影響を及ぼしかねない。

壊した年だ。これで社会主義国が崩壊し、米国王導で市場経済・民主主義が世界をリードすることが期待された。多くの政治学者がそうした未来を描いた。そして10年国と米国の確執は日本の企業の業績にも大きな影響を及ぼしかねない。

主力は新興国へシフト

01年の年末には中国はWTO(世界貿易機関)へ加盟した。それから現在までに日本のGDP(国内総生産)は4・3兆ドルから4・9兆ドルへとわずかしが増えな

ということが幻想であることを明らかにした。米ソの対立という恐怖の安定の時代は終わったが、中東など多くの地域で世界秩序を不安定化する動きが続いている。そうした中で出てきたのが、BRICsという考え方だ。中国などの新興国がこれからの世界経済を牽引するので、米国をはじめとする先進国の経済成長率が低下することは、世界経済の成長の鈍化を意味するものではないというものだ。

かったが、同じ期間で中国のGDPは3・9兆ドルから39兆ドルへ10倍に膨れ上がっている。中国の経済が急拡大することは世界経済に好影響ももたらしているが、米中摩擦に象徴されるように世界経済の不安定要因ともなっている。このように整理してみると、経済のグローバル化の流れは主力が先進国から新興国にシフトしつつあるとはいえ、今後も非常に重要な意味を持っていることは明らかだ。一方で、米国王導の流れが崩れていく中で、非常に不安定で時には危険な動きも増えているように見える。グローバル化の流れから逃げることはできないが、そこで起きるさまざまな変化や事件にこれまで以上に注目していかななくてはならない。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。